

令和8年2月26日
学習塾ステップ
塾長 遠藤陽介
特色検査対策チーム

令和8年度 公立高校入試における特色検査に関するステップの見解

本日2月26日、神奈川県教育委員会（以下、「県教委」）から特色検査の模範解答が発表されました。それに先がけて、ステップでは特色検査が実施された2月18日に独自に解答を作成し、ステップ公式YouTubeチャンネルとホームページにて公開いたしました。

この解答は、ステップ特色検査対策チームを中心に約10名のスタッフで何度も検討、検証し作成したものです。

しかしながら、本日県教委から発表された模範解答と答えが異なる問題が1問ありました。

また、令和8年度公立高校入試における特色検査の難易度は、質・量ともに中学3年生の学習活動や努力が報われる試験であったとは言い難いものでした。

これらについて、ステップの見解を皆さんにお伝えするものであります。

【1】解答が異なった問題と、ステップの判断根拠

ステップと県教委の発表した解答で答えが異なっていたのは、問2（オ）です。

ステップは「6」を正解としましたが、県教委の模範解答では「2」となっていました。

このことで結果的に多くの受験生の皆さんにご心配をおかけしてしまったことをお詫び申し上げます。

この問題は、ステップで解答を検討した際にも「2」と「6」で議論になりましたが、以下のような根拠で「6」を答えとして採用いたしました。

問2（オ）は、サキさんとリオさんが食品ロスについての発表に向けて、発表メモと文章Ⅰ、文章Ⅱをクラスメイトに見せて、A～Cの3人からよりよい発表にするための助言をもらう、という状況設定で、3人の助言内容がそれぞれ妥当かどうかを問う問題でした。

- ・県教委が発表した解答 選択肢：2（A：妥当 B：妥当 C：妥当でない）
- ・ステップが公開した解答 選択肢：6（A：妥当でない B：妥当 C：妥当でない）

県教委とステップの違いはAの助言のみで、県教委は「妥当」としていますが、ステップは「妥当でない」と判断いたしました。

Aの助言は以下の通りです。

「(2) (日本の廃棄物処理方法の現状) については、ごみの焼却と原燃料利用に伴う二酸化炭素の排出が廃棄物分野からの温室効果ガス排出量の多くを占めていると書いてあるね。その際使用される廃プラスチックの使用量もさらに提示したうえで、(5) (食品ロスの飼料化とその効果) が温室効果ガスの削減につながるとした方が説得力のある発表になると思うよ。」

Aの助言の前半の1文については、文章Ⅰの4行目に「2019年度の廃棄物分野からの温室効果ガス排出量のうち、およそ76%は『廃棄物の燃焼と原燃料利用に伴う二酸化炭素排出』だったという。」と書かれてあるため、前半部分は妥当と判断しました。

意見が分かれたのは後半の1文です。Aの助言では「食品ロスの飼料化とその効果」の「効果」の内容を「温室効果ガスの削減」とするよう助言しています。食品ロスの飼料化については文章Ⅱに記載がありますが、18行目から「食品リサイクルによる飼料化は、低迷する食料自給率の向上にもつながるといえる。」と書かれています。私たちは、ここを根拠に、「効果」とは「食料自給率の向上」であると判断しました。よって、「温室効果ガス削減」を「効果」とするAの助言は妥当でないと結論づけました。

しかしながら、食品ロスの飼料化が温室効果ガス削減につながらないとは言いきれません。文章Ⅰの4行目以降に「廃棄物分野からの温室効果ガス排出量のうち、およそ76%は『廃棄物の燃焼と原燃料利用に伴う二酸化炭素排出』だった」こと、またその主たる要因が「重量の8割が水分である生ごみのような『燃やしにくいごみ』を『燃えるごみ』として焼却するために、分別回収した廃プラスチックを燃料として投入している」ことであると書かれています。この部分から、

「食品ロスを減らす」

- 「燃やしにくいごみが減る」
- 「投入する廃プラスチックが減る」
- 「二酸化炭素の排出量が減る（＝温室効果ガスの削減につながる）」

と論を進めることができます。これを根拠にAの助言を判断すれば「妥当」とも考えられます。実際、私たちが解答を検討する際も、上記のような論理展開をもとに「Aは妥当ではないか」とするスタッフも複数いました。

県教委の模範解答は「Aは妥当」となっていますが、この「間接的に温室効果ガス削減につながる」という論理展開に基づいて解答を作成したものと推測します。

ただ、「飼料化が温室効果ガス削減につながる」という理論にも不備があると考えました。確かに、文章Iにあるように燃やしにくいごみを減らし、廃プラスチックの投入量を減らせば、焼却処理に伴う温室効果ガスの発生量は減ります。一方で、飼料化においても処理過程や畜産利用の段階で温室効果ガスが発生します。前述のマイナス分がこのプラス分を上回らなければ「削減につながった」という結論にはなりません。Aの助言にはその視点が抜けており、その点でもAは「妥当でない」と判断しました。

また、問題設定の曖昧さも、私たちが判断に迷った要因の一つです。

先に述べたように、A～Cの3人からよりよい発表にするための助言をもらう、という状況設定で、3人の助言内容がそれぞれ妥当かどうかを問う問題ですが、いったい「誰の視点」から「どのような基準」で妥当か否かを判断するのか、また、「よい発表」とはどのような発表なのか、その条件設定が問題文には提示されていません。そのため、妥当性を判断する人間の主観によって「妥当だ」「妥当でない」という判断には振れ幅が生じると言えるでしょう。つまり、複数の基準が成り立つ問題となっています。

この点、私たちの間でも相当議論になりました。

そこで私たちは「問題に書かれていること」に忠実な立場を選びました。

発表メモには次のように書かれています。

(食品ロスについて)

- (1) 食品ロスに興味をもった理由
 - (2) 日本の廃棄物処理方法の現状
 - (3) 食品ロスの再生利用についての現状と問題点
 - (4) 食品ロスの堆肥化における課題
 - (5) 食品ロスの飼料化とその効果
 - (6) まとめ
-

メモには通し番号が振られています。また、(1)と(6)については問題文に記載はありませんが、(2)～(5)の内容は以下のように、通し番号の順が文章Ⅰの文脈順に、さらに文章Ⅱへとつながっています。

- (2) 文章Ⅰ 1行目から7行目
- (3) 文章Ⅰ 8行目から24行目
- (4) 文章Ⅰ 25行目から31行目
- (5) 文章Ⅱ すべて

また、(1)が興味をもった理由、(6)がまとめであることから、この通し番号順に発表がされることがイメージできる構成となっています。

しかしながら、Aは(2)の途中で(5)の内容に触れた方がよいと助言しています。

一般論として、(2)を発表する際に、県教委の模範解答のような「メモの順番にこだわらず複数の話題を組み合わせた方がよい（部分にこだわらず包括的にした方がよい）」という基準での判断もあり得るでしょう。ただ、書かれていることに忠実に問題を解くならば、「あくまでも(2)の内容に集中して話した方がよい（順番通りがよい）」、「(2)と(5)の関連性については、(5)を発表する場面、もしくは(6)まとめの場面で触れた方がよい」という基準の方が適切である、つまりAは「妥当でない」という結論に達しました。

生徒Bの助言の中で「(3)の問題の解決策として(5)を提示したいなら」と述べていますが、順番を変えて(3)の発表の際に(5)の内容まで言及した方がよい、という趣旨の助言であるとは断定できないため、この部分については「妥当」と判断しました。

以上が、私たちが「Aは妥当でない」と判断した根拠です。

【2】反省点

「妥当」「妥当でない」という表現も含めて主観的要素が入る問題であったため、私たちの中でも判断が分かれました。上記のように、条件設定も曖昧だったこともあり議論は長時間に及びました。「2つとも正解になり得るのではないか」、「問題そのものが不適切なのではないか」という意見もありました。

しかしながら、「一つ選び」という設問の条件から、「2も6も、いずれも正解」ということはあり得ませんから、答えを1つにしぼらざるを得ませんでした。

ここで私たちの反省点ですが、「2も6もいずれも答えとして成り立つ可能性がある」という、私たちのありのままの判断を、そのまま表現すべきでした。

今後はこのような際には、無理に解答をしぼることはせず、私たちの率直な見解を提示することを検討してまいります。

【3】提言

解答をしぼるための条件設定が非常に曖昧なこともあり、受験生たちが試験会場でわずか数分間で答えを1つにしぼり込むのは困難で重い作業であったと考えます。

今年の特徴検査には、そのような難度の問題が、共通問題の問1・問2から後半の共通選択問題まで連続して出題されています。

中学3年生の学力で、60分間という制限時間内に、この質と量の問題をすべて解き切ることは至難の業であり、重すぎる負担と言わざるを得ません。実際、私たち特徴検査対策チームの教師、スタッフの中でも60分間ですべての問題を解き切れるメンバーはいませんでした。

今回のような特徴検査では「問題をよく読んで、与えられた条件を吟味し、しっかり考えて解く」という常道の取り組みでは到底時間が足りません。「よく読んで」といって、時間が足りなくなります。条件を「丁寧に吟味」といって、時間が足りなくなります。「しっかり考えて」といって、時間が足りなくなるのが現実です。

生徒の皆さんの努力を反映できるようにするため、60分で取り組める程度の量にするなり、試験時間を2倍にするなり、共通問題を初期の頃のような難易度に戻すなり、生徒の学力や努力を適切に判断できる検査問題に改善していただき、「中学3年間での生徒たちの努力が報われる試験」にさせていただくことを切望するものです。

※私たちの問2（オ）の答えには【1】の項で述べたような根拠がございますので、ステップの模範解答は変更せず、県教委発表の解答も併記する形にいたします。